スピノザ・コネクションから『スピノザと近代ドイツ』へ

吉田量彦（東京国際大学）

1．スピノザ・コネクション事始め

　一橋大学を中心に長期にわたって開催され、評者もささやかながら関わらせていただいてきた連続企画「スピノザ・コネクション」の現時点までの成果が、一冊の分厚い論集『スピノザと近代ドイツ』（以下、本書）にまとめられ、この3月に刊行された[[1]](#footnote-1)。実にめでたいことである。

　企画者にして本書の編集責任者（にして寄稿者の一人）である加藤泰史氏（現・椙山女学園大学）とは、それ以前から面識があった。毎年9月末から10月の頭にかけて開催される、日本倫理学会の年次大会が初対面だったと記憶している。その年に加藤氏が行ったカント倫理学関連の研究報告を聴き、会場から質問させていただいたのがすべての始まりである。手元に当時の資料が残っておらず、正確にいつのことか思い出せないが、一橋大学に移る前の氏の勤務先であった南山大学が会場となった、2009年秋の大会だろうか。

　「スピノザ・コネクション」が始動したのは2014年7月のことで、記念すべき第1回の会合には評者も（特に何もしなかったが）声をかけていただいて赴いた。一橋大学国立キャンパスの南端というか、正確にはキャンパスを出て狭い通りを南に一つ渡った所にひっそりとたたずむ、佐野書院が会場であった（p.376）。佐野書院はこの後もしばしば「スピノザ・コネクション」や、その姉妹企画というか母体企画とでもいうべき、人間の尊厳の概念史研究という加藤氏主導の巨大プロジェクトの会場となり、評者も（主にドイツ語圏からの招聘研究者の通訳や講演原稿の翻訳者として）年に何度か足を運ぶことになる[[2]](#footnote-2)。

この時の報告者3名は、それぞれ本書第1章から第3章の執筆者に対応しており、発表もこの順番だった。つまり（冒頭の加藤氏による短い挨拶と企画説明を除けば）記念すべき第1回会合の口火を切ったのは、第1章担当の伊豆藏好美氏であった。周知の通り、ベールは『歴史批評辞典』でスピノザの人柄には敬意を表しつつ、その思想にはさまざまな論難を浴びせており、ことに『神学・政治論』などは実質的内容にほぼ触れることなく「有害で唾棄すべき本」あつかいで片付けてしまう（p.21）。つまり「有害だから読むな」と言っているに等しいわけだが、当日の会場はこの「読むな」が本気の「読むな」なのか、それとも「いいか？危ないから絶対読むなよ！絶対だぞ！」的な「読むな」なのか、つまり本当にしてほしいことを逆説的にほのめかした「読むな」なのかをめぐって大いに盛り上がった[[3]](#footnote-3)。おかげでその後しばらく、ベールがリアクション芸人に見えて困った。

　それから、時には比較的長い中断期間も挟みつつ（これは恐らく加藤氏が母体企画の方に時間と労力を傾注せざるをえなかったからと思われる）、このような研究会をコツコツ積み重ねていった。その積み重ねが功を奏し、後はカントと、いわゆるドイツ観念論の三羽烏たち（フィヒテ、シェリング、ヘーゲル）のスピノザ理解の検証を残すのみという、当座の一区切りが見えてきたまさにそのタイミングで、新型コロナウィルス感染症の全世界的流行に見舞われた。スピノザ・コネクションどころか人間同士の生身でのコネクションそのものに多大な制約がかかるようになり、研究会はまた長期の中断を余儀なくされた。ほぼ同時に加藤氏も一橋大学を定年で退官され、現在の大学に赴任するため首都圏を離れていかれた。

　加藤氏から久しぶりに連絡を受けたのは、昨年（2021年）の梅雨がまだ明けきらないころだったと思う。8月の夏期休暇中にスピノザ・コネクションをリモート会議形式で再開するので、コメンテーターを依頼したいという連絡だった。本書第3部（第11章～第15章）はこのリモート開催の研究会での報告に基づいている。

　恐ろしいことに、これだけの人数の報告者が、たった一日で一会場の研究会に次々に登壇したのである。その日、1年遅れのオリンピックと新型コロナウィルス感染再拡大に沸き立つ首都圏を逃れて、北関東の実家に早々に帰省していた評者は、実家の勉強部屋からリモート会議に参加した。当日の日記がわりのメモが残っている。

[2021年]8／6（金）　シンポジウムのコメンテーター（リモート）として一日中働く。てっきり午後からと思っていたら、直前にプログラムを確認して10：00～18：00の超ハードな詰め込み日程とわかる。加藤泰史先生のこの手の企画はホント色々盛りすぎになることが多い。

リモート開催で現地に移動する手間がないとはいえ、大変疲れる一日だったことが末文のぼやきからも分かる。8時間にわたってすべての報告にA4紙6枚にわたって細かい字でびっしりとメモを取り（このメモも残っている）、その場で思いつく限りの質問やコメントを投じさせていただいたはずなのだが、その8時間が休憩時間も含めて一切記憶に残っていない。よほど余裕のない状態で脊髄反射的に言葉を発していたと思われる。記憶が復活するのは終了後のことで、勉強部屋から居間に移動してビールを一口飲んだ時、ああ、オレ今日一日「もの言う首」だったな、とぼんやり思ったのを覚えている（もう一人のコメンテーターが上野修氏だったのである）。

2．『スピノザと近代ドイツ』―その構成と内容

　手元にない方のために説明しておくと、本書は著者を異にする独立した15本の論考（ただし一人で複数の論考を担当した著者もいる）を本文とし（p.1-374）、編者による序（p.v-xxii）と後書き（p.375-377）がこれを前後から挟む形で成立している。巻末には参照上の利便性を高めるための付録として、人名索引（左横組みp.1-4）、1670年（『神学・政治論』刊行）から1832年（ゲーテ没）までのスピノザ受容史にまつわる関連事項を拾い上げた年表（同p.5-16）、主要登場人物の主要著作を紹介した書誌一覧（同p.17-25）が続く。その内容は質量ともに豊かと言う他なく、各論考を単独で拾い読みしても教えられることが多いのはもちろんだが、いざ通読してみると、本文全体をさらに3部に分かつ構成（後述）もふくめて、15本の論考全体が編者の明確な意図の下に配置されていることが分かる[[4]](#footnote-4)。

本書全体の副題は「思想史の虚軸」となっている。スピノザのことである。かつて上野修氏がご自身の科研費企画の中で使い始めた表現であり、いないもののように扱われるにもかかわらず誰もがどこかで否応なく意識してしまっているという、17世紀以後の西洋近代思想史の中でスピノザが発揮してきた不思議で不可解な存在感をうまく言い当てている。

加藤氏はこれをふまえた上で、ことを18世紀ドイツ語圏の思想史に絞るなら、そこでのスピノザは虚軸どころかむしろ「実軸」であるという（p.v.）[[5]](#footnote-5)。確かに18世紀のある時期以後、ドイツ語圏の思想史は「いないもの」どころか、どこを切ってもスピノザが出てくるスピノザまみれの状態になる。したがって、むしろスピノザという思考の「補助線」を引いた上で、この補助線とのつながり合い（コネクション！）を確認しながらでないと、18世紀ドイツの思想空間の立体的な理解や再構成は覚束なくなるという（p.v-vi）。これももっともな指摘である。

にもかかわらず、加藤氏は副題を「思想史の実軸」とはしていない。なぜだろう。上野氏に忖度したからとか、虚軸と比べて実軸という言葉の響きが何となくダサいからとか、理由はいろいろ考えられる。しかし勝手な憶測が許されるなら、たとえスピノザの名が18世紀ドイツ語圏の思想家たちの談話や著述の中にはっきり出るようになっても、その姿が（スピノザの名を出す当の人物も含めて）誰の目にもくっきり見えているとは限らなかったからというのが一番の理由と思われる。森の輪郭は遠くから眺めている分にはくっきり見えるのに、森に分け入れば巨大な木々の連なりに紛れて消えてしまう。18世紀ドイツ語圏の思想史を森に、一人一人の思想家たちを木々にたとえるなら、スピノザはこの森の輪郭のようなものであり、わたしたちがこの森に近づけば近づくほど、分け入れば分け入るほどその姿はぼやけてしまう。その意味ではやはり虚軸とでも呼ぶしかない存在であり、加藤氏もそこを察していたのではないだろうか。

既にふれたが、本文全体は3部構成で章立てられている。第1部「ドイツ啓蒙主義とスピノザ（主義）」は、18世紀ドイツ語圏におけるスピノザ受容史というよりも、受容前史とでも呼ぶべき時代にあてられた部分である（p.1-94）。つまりスピノザとその哲学について肯定的に語ること自体に強い社会的制約がかかった時代、言い換えれば否定や断罪の文脈に置かない限りその名を口にすることが難しかった時代が取り上げられている。

そこで目を引くのは、やはりライプニッツの分からなさである（第2章）。ベールと並び、ドイツ語圏におけるスピノザ受容史のよくも悪くも淵源となったライプニッツは、本書で取り上げられる人物の中でただ一人生前のスピノザと接触があったにもかかわらず（p.29ff.）、後にこの接触に触れられるのを嫌がるようになり、スピノザへの直接的な言及もほとんどなくなる（p.33）。限られた言及例から分かるのは、ライプニッツを一番悩ませたのが神の意志（善意）も人間の自由意志も認めないスピノザの反目的論的世界観であったことくらいであり、ではそうした世界観に対する否定的理解がスピノザの哲学の他の局面、たとえば『神学・政治論』『政治論』といった政治哲学的著作に対する評価とどう絡んでくるのか（こないのか）となると、テクストに則して論じるのは途端に困難になる[[6]](#footnote-6)。スピノザが虚軸なら、ライプニッツのスピノザ観もたいがい虚軸なのである。

続く2つの章で、いわゆるライプニッツ＝ヴォルフ学派の系譜においてもスピノザを口にする「否定的文脈」は決して一枚岩ではなく、たとえば元締めのヴォルフ（第3章）と後発世代のバウムガルテン（第4章）の間に見られるように、論者に応じてさまざまな視点・力点の置きどころの違いがあったらしいことが確認される。ことに第3章では、天才・ライプニッツのスピノザ理解と凡人・ヴォルフのそれを峻別し、後者の「凡庸さ」を強調することで前者を批判の矛先から守ろうとする、解釈史上しばしば見られる記述の偏向が指摘されていて興味深い（p.60-64）。というのも、こうした紋切り型の記述法も、そもそもライプニッツのスピノザ観がどこかぼやけたものに止まっていないと使えないし、たとえ使ってもすぐ露見する小細工に終わってしまうように思われるからである。

第2部「汎神論論争とその周辺」は、表題の通り、いわゆる汎神論論争をさまざまな角度から主役を入れ替えて繰り返し語り直した部分であり、評者としては内容上本書の中心をなすと考えている（p.95-236）。全体が一種の群像劇になっていて、主役は章ごとに入れ替わるのだが、誰を主役にしても必ず絡んでくるのがヤコービである。ただしそこでのヤコービの人物像は、レッシングとメンデルスゾーンを悪意ある誘導によって「はめた」不誠実な陰謀家という、レオ・シュトラウスに代表される従来型の理解と（第5章）、そうした陰謀家的ヤコービ像を全否定はしないまでも、そこから巧みに距離をとった理解（第6章、第7章）に分かれており、論者によって一定しない。いわゆるソクラテス的皮肉Sokratische Ironie を悪意ある空とぼけと解するかどうかでソクラテスの印象は大分変わってくるが、同じことはヤコービにも当てはまるように思われる。

ヤコービという火付け役を共有しているからか、第2部に収められた論考には（決して悪い意味ではなく）内容的に重なり合う記述が多く、全体としては汎神論論争という同じ言説空間をさまざまなルートで散策し、さまざまな角度からさまざまな見どころを炙り出そうとする共同プロジェクトのような印象を受ける。中でも佐山圭司氏による第7章は、今後ヤコービの思想史的意義について邦語文献で概観を得ようとするなら、まず読まれるべき入門書的役割を果たしうる貴重な仕事である（後藤正英氏による第6章と併せ読むとさらに理解が進むかもしれない）。また、汎神論論争全体の主役は文句なしにヤコービなのだが、ヤコービとの接触以前からスピノザを独自研究していた重要な脇役陣として、第2部後半に収められた論考ではヘルダー（第8章、第10章）とゲーテ（第9章）が取り上げられる。関与した人それぞれが元々持っていた火薬庫に、ヤコービという起爆剤が引火して起きたのが汎神論論争であったことがよく分かる。

第2部に続き、第3部「カントとドイツ観念論のスピノザ受容」（p.237-374）も群像劇だが、主要登場人物たちの世代が異なっており、カント（第11章）だけが汎神論論争にリアルタイムで関与した世代に属する。「スピノザ主義」に対するカントの反応は、スピノザ自身の思想との（かなり図式的で食い足りない印象を受ける）対決と、ヘルダーによって有機体論的な「かさ増し」を受けたスピノザ主義との（詳細かつ執拗だがスピノザ自身の思想と直接には絡まない）対決に二重化されており（p.239-244）、批判哲学の確立後にカントが積極的に取り組んだのはむしろ後者である。

それ以外は最年長のフィヒテ（第12章）でも論争勃発時にはまだ世に出ていない23歳の若造であり、ヘーゲル（第14章、同15歳）、ノヴァーリス（第15章、同13歳）、シェリング（第13章、同10歳）に至っては、若造どころか子供である。いわばポスト汎神論論争世代の彼らにとって、『スピノザ書簡』はいかがわしい論争の書どころか、むしろ現代思想の最先端を歩むのに不可欠の教養の一部となっており、それまでスピノザという名前そのものにしつこく張り付いていた否定的感情も、彼らの間にはほぼ見られない[[7]](#footnote-7)。その代わり、若気の至りというべきか、彼らの哲学体系の構想は（ノヴァーリスに体系構想があったかどうかはかなり怪しいが）数年ごとにくるくる変化しており、どの時期のどこにどうスピノザが関わってくるか、またその「関わり」は本当にスピノザに関連づけられるようなものなのか、見極めるのは困難と言うほかない。

これに加えて、彼らの体系構想の変遷は、時系列という縦軸だけでなく、彼ら自身の間の思想的接近と離反という横軸まで視野に収めておかないと十全な理解は覚束ない。身も蓋もない言い方になるが、カントの忠実な理解者を自称していたフィヒテがやがて自我一元論的な知識学を提唱し（p.277-284）、そのフィヒテの忠実な理解者を自称していたシェリングが精神と自然を等根源的に位置づける同一哲学を提唱し（p.316-319）、そのシェリングの忠実な同調者を自称していたヘーゲルが「すべての牛が黒くなる夜」のような同一哲学と決別して『精神の現象学』を提唱するという（p.336-344）[[8]](#footnote-8)、カントが生きていてこれを見たら「どうしてこうなった」といぶかしむこと請け合いの過程をたどるのがドイツ観念論哲学なのである。

したがって、ドイツ観念論哲学とスピノザの関係を、たとえばフィヒテとスピノザ、シェリングとスピノザ、ヘーゲルとスピノザといった具合に、一対一の受容関係として記述しようとしてもどこかに無理が出る。むしろフィヒテとスピノザを論じつつカントとフィヒテの関係を、シェリングとスピノザを論じつつフィヒテとシェリングの関係を、そしてヘーゲルとスピノザの関係を論じつつシェリングとヘーゲルの関係を、時系列の進行に伴って変化する3者の重なり具合とずれ具合に目配りしながら同時並行的に論じていく必要がある。つまり、どう論じようとしても一種の群像劇にならざるをえないのである。この結果、もちろん著者の方々の責任ではさらさらないのだが、第3部は第2部にもまして章ごとのタイトルと内容のずれというか、登場人物たちの章をまたいだ越境が目立つ部分となっている。特に第12章、13章、14章は一続きの論考として通読した方がよりよい見通しをえられると思われる。

ただし第3部全体を通読しても、第2部ほどまとまった印象は受けない。これはなぜだろうと思って色々考えてみた結果、汎神論論争の時のヤコービのような核となる人物がいないせいではないかという理由に思い当たった。いや、「いない」という表現は不正確かもしれない。カント以後のドイツ観念論の哲学者たちは、スピノザとはそれぞれそれなりに真剣に取り組むそぶりを示していた反面、媒介者ヤコービについてはいないもののように扱うか、あるいは（ヘーゲルが『信と知』で試みたように）重要な問題提起こそ行ったものの既に論破済みの過去の人のように扱うかのどちらかであり、いわばヤコービを核とすることを頑なに拒み続けることで自らの思想を形成していった観がある。だとするとわたしたちは、この時代のドイツ語圏の哲学に対する理解を一層深めるために、ヤコービというもう一つの虚軸からもう一本の補助線を引く必要があるのかもしれない。

1. 加藤泰史（編）『スピノザと近代ドイツ　思想史の虚軸』岩波書店、2022年 [↑](#footnote-ref-1)
2. 文科省科研費を使った尊厳概念研究プロジェクトは、科研費企画としては何度かの更新を経て、直近では科研費基盤研究（S）「尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念史的・比較文化論的研究」（研究課題番号：18H05218、研究代表者：加藤泰史、2018～2022年度）に紐づけされている。本書もその「中間研究成果」の一つである（p.vii）。 [↑](#footnote-ref-2)
3. ちなみに本書第1章でもそう書かれているが（p.21-22）、いろいろ盛り上がったが結局「本当のところはわからない」という結論に落ち着いた。 [↑](#footnote-ref-3)
4. どの章にも（第15章のみ例外）その表題か副題に、スピノザの名と、スピノザと直接間接に対峙した章ごとの中心人物の名が挙げられており、原則的に後者の生年順で章立てられているのだが、この原則が時々破られる（第1章と第2章、第4章と第5章、第13章～第15章）。いずれも原則通りに配置すると何か収まりが悪くなってしまう箇所であり、編者の意図を強く意識させられる。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 実軸という表現は第12章末で入江幸男氏も使っている（p.295-296）。 [↑](#footnote-ref-5)
6. どうやら第2章著者の佐々木能章氏は、そもそも自由意志を否定するスピノザがなぜ政治哲学的著作を著して思考・言論・表現の自由を擁護できるのか、ライプニッツは理解できていなかったと見立てているようだが（p.44）、評者の読み違いかもしれない。 [↑](#footnote-ref-6)
7. それどころか、平尾昌宏氏が第15章で指摘するように、ノヴァーリスやフリードリヒ・シュレーゲルたち初期ロマン派に至っては、スピノザの著作もろくに読まないまま、肯定的含意をもたせた「記号」としてその名に酔いしれていた形跡さえ見て取れる（p.365f.）。 [↑](#footnote-ref-7)
8. ヘーゲルが『精神の現象学』（1807）序論で用いているシェリング批判のレトリックは、実はヤコービが『フリードリヒ・ケッペン宛の3通の書簡Drei Briefe an Friedrich Köppen』（1803）で行ったシェリング自然哲学・同一哲学批判（と、これに同調していた『信と知Glauben und Wissen』（1802）時代のヘーゲル自身の体系構想に向けられた批判）のそれに、丸パクリしたのかと思うほど酷似している。この点についてはSandkaulen, Birgit: System und Zeitlichkeit. Jacobi im Streit mit Hegel und Schelling. In: dies.: *Jacobis Philosophie. Über den Widerspruch zwischen System und Freiheit*. Hamburg (Felix Meiner), 2019. S. 271-287（ザントカウレン（田中光訳）「体系と時間性―ヘーゲルとシェリングとの論争におけるヤコービ」『スピノザーナ』18号（2021-2022）、近刊）を参照。 [↑](#footnote-ref-8)